
俺達が生きる理由。

▼ 玉椿 寿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達が生きる理由。

【Nコード】

N8840Y

【作者名】

▼ 玉椿 寿

【あらすじ】

俺とあいつの、凸凹生活。

ブローグ

その日は、いつもと変わらない日だった。いや、訂正。変わらない日になるはずだった。そんなこと言ったらあいつは絶対言うだろう。『いつもっていつのことだい？毎日全く同じ日なんてありえないことじゃないか。そうだろ？君は昨日と同じ時間に起きて、まったく同じ歩幅で歩いて、同じ心拍数で、同じ発音で会話して、同じ回数 of 瞬きをするというのかい』と。しゃべり出したら止まらないんだ、あいつは。でも自分からしゃべりだすことはほとんどないから、下手したら1日中しゃべらない日だってあるだろう。そしてしゃべりきった後は必ずこういうんだ。『君は本当にバカだね、』と。

プロローグ（後書き）

頑張って書きまーす

凸凹生活？

俺は起きた。直感した。6時だ、と。6時に起きる夢をかなえたんだ！と。

自信満々で時計を見る。きっちり30分遅れた時計を。その時計は無邪気に8のところを指していた。

「…。30分遅れているんだから、今は8時半か。」
言ってみたものの実感はなかった。俺の頭の中では6時に起きたことになっている。

一分ほどしてやっと状況を理解した。

「は、はぢはん…！？」

あわてて着替えて家を出る。

こういうとき女子だと用意が色々あつて大変だが、男子は楽だ。

学校が始まるのは八時三十五分。俺の足なら余裕で着ける。よしっ

…と思った時、空から声がふってきた。

「おい、バカにもほどがあるだろ。」

え？

聞きなれた声だった。俺はこの声をいやっちゅうほど知っている。しかし…空？

変だと思いながらも空を見上げた。バカバカしいほどに美しい空を。

——何もなかった。

「こっちだよ」

今度は後ろからその声が聞こえた。

走る足を止めて後ろを見る。

見慣れた顔があった。

「ハルヒト…。」

空から降ってきた声の主を、俺は知っている。そして、こいつの性

格が俺の性格と真反対だってことも。

「君は何をあわてているんだい？今日は土曜日じゃないか。」

そして、こいつは俺の兄弟だってことも――。

電柱のお兄さん。

ハルヒトは、いつもより百倍くらい馬鹿にした口調で言った。

「まぬけにもほどがあるよ。あのすずめすら曜日くらいわかってるだろうに全く君はなんでそう…（以下省略）」

俺は、頑張って走った道をハルヒトの愚痴を聞きながら歩いた。今回は、自分でも思う。まぬけだ。

にしても…何でハルヒトの声が空から聞こえてきたんだ？謎だ。

「僕は電柱の上から君のまぬけヅラを見学してたのさ。」

ハルヒトがまるで俺の心を読んだかのようなタイミングで言った。

いや、まて。いまサラッとすげえこと言ったよな？『電柱の上から』とか。

ハルヒトもよほどの変人だ。こいつと兄弟なんだ、と実感したことは一度もない。

俺ですら電柱の上なんか登らないし。

「こんなまぬけと兄弟だなんて…僕は宇宙一不幸な人間だ！！」
と言っただけ息をつくハルヒト。と、というか宇宙って規模大きいなっ！

そんなことを話している間に家に着いた。早かった。

俺とハルヒトが住む家は、一軒家。普通の。

でも裏に空き地がある。俺はそこでいつもサッカーをしている

「ていうかハルヒト、いいかげん俺のこと君って呼ぶのやめろよ。

名前ちゃんとあるんだし…」

俺が覚えている限りでハルヒトは、俺のことを名前で呼んだことがない。

「やだね。君に命令されるとか。」

俺らの家族構成。

ああそうそう言い忘れてた。

俺の名前は山口京介ってんだ。

ちなみに今年で高¹。

そんでもって双子の兄、ハルヒトは山口春人って書く。

俺達にはあと一人、兄弟がいる。

妹のモミジ。 山口栞。

超黒髪ロングヘアの俺とハルヒトを足して2で割ったような感じ。
1コ下で、今年は受験生だ。

母さんと父さんは仕事でフランス。

ちなみに言うと母さんはついて行っただけ。 俺らをこの窮屈な日

本に置いて。

ただのバカ親だと思う。

まあその分俺は自由に生きてるけど。

家のことはだいたい3人で回してやっている。

…… ってもほとんどは栞と俺がやってるんだが。

ハルヒトは「長男の特権」とか言ってるのんきに本を読んでいることが多い。

俺もそうしたいところだが、栞一人にやらせるのは気が引ける。
…から自動的にやってしまう。

おかげでそこらへんの女子より料理は上手になった。
洗濯は、栞。

風呂掃除は俺。

ゴミ出しはハルヒト。

よく考えたら洗濯と風呂掃除は毎日あるが、ゴミ出しは週に2回じゃないか！！

こんな風に毎日平和に過ぎていく、はずだった――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8840y/>

俺達が生きる理由。

2011年11月26日20時45分発行